

令和2年度 第二回企画展

富士山と養蚕

—信仰の側面から—



神代紀曰天孫曰汝所懷者非吾子
木花開耶姬命忽恨曰妾所娠若兆
天孫胤必當蟲滅實天孫胤者火不
能害即作無戸室入居其内放火燒
室煙內生三子火少無所害所以奉
稱安產并除火灾救無寶難守護神
也從保食神傳五穀以狹名田稻釀
天甜酒又養蠶而織神御衣故五穀
成就酒造糴蠶守護御神也



山梨県立富士山世界遺産センター



蚕神碑

富士浅間神社（富士吉田市小明見）
向原では6軒の養蚕農家が、蚕神としてオシラ神を祀っていた。この6軒で年に一度お日待（ひまち）を行い、当番となった家は蚕神の「オチョウヤ」（祠）を置いた。日待が終わると、次の当番に「オチョウヤ」を渡したという。養蚕の信仰にはバラエティーに富んだ形態がみられる。



4右左口養蚕関係資料－3山梨県蚕業試験場卒業記念アルバム 個人蔵
昭和9年（1934）

大正7年（1918）に創立した山梨県蚕業試験場の繭の標本室（上）と桑園（下）。桑の栽培から始まる養蚕は、製糸業や絹織物業といった日本の重要産業を支えた。

山梨県立富士山世界遺産センターでは、富士山の学術調査を進め、講座の実施、研究紀要の発行、年2回の企画展の開催などを通して成果を発表しています。平成25年（2013）に富士山が世界遺産に登録された際、「信仰の対象と芸術の源泉」という要素が普遍的な価値とされました。「荘厳な富士山の形姿は、古代から今日に至るまで山岳信仰の伝統を鼓舞し続け、多様な信仰の対象として崇拜されてきたこと」—このことが評価されたのです。

さて「多様な信仰」とありますか、富士山の神仏に人々は何を祈ったのでしょうか。今回の企画展では、養蚕をテーマに考えてみたいと思います。養蚕は古代から行われ、特に幕末・明治以降は蚕が生み出す生糸が日本の経済を支えました。江戸時代の画家であり富士山の行者でもあった長島泰行は、富士信仰に関する案内書『富士山真景之図』を著して養蚕の起源を次のように語ります。「仁徳天皇の時代、駿河の富士郡に不死の翁が住んでいた。富士山麓には大きな桑の木があり、蚕が自生して繭を作っていた。翁はこの繭から絹を織って天皇に献上した」。

養蚕の起源を語る伝承は他のバリエーションもあり、また、蚕の神様もさまざまです。養蚕に関する信仰にも多様性があり、それは富士信仰とどのように関わるのでしょうか。またその信仰はどのように広がったのでしょうか。富士信仰のあり方を知る一つの手がかりとして、今回の企画展が資するところがあれば幸いと存じます。

令和2年（2020）12月

山梨県立富士山世界遺産センター

蚕が支えた日本

糸を原料にして布を織る。日本列島ではこの営みは、機織り具の出土から、すでに弥生時代には行われていたことが分かる。3世紀の中国の歴史書『魏志』倭人伝には、桑の栽培と養蚕についての記述がある。『古事記』や『日本書紀』に描かれる神話は、殺害された大氣津比売神、もしくは保食神といった女神から蚕が生じたことを伝えている。『書紀』には稚産靈神の頭から桑と蚕が発生した話も書かれている。養蚕の普及は、天照大神の時から始まり、雄略や繼体、欽明・推古天皇などが奨励したという言説もある。

律令制の時代になると、甲斐国は上野や常陸などともに糸を生産する「龜糸国」と位置付けられた。名称からして上質の糸ではなかったようだが、鎌倉時代末期には年貢を絹で納める荘園もあったので、古くから養蚕→製糸→織物生産の工程が存在した可能性がある。江戸時代初期には、甲斐国の郡内地方は養蚕と絹織物生産の先進地帯だった。

列島全体でみると、室町時代の明（中国）、江戸時代初期のポルトガルとの貿易では、中国産の生糸が主要な輸入品だった。まだ国内産の糸だけでは足りなかった。しかし、江戸時代を通して糸の生産量はかなり増加する。文化年間（1804～18）の甲斐国は、養蚕が盛んな16カ国の1つに数えられている（『蚕飼絹織大成』）。幕末に欧米列強との貿易が始まると、生糸は日本の主力輸出品となる。明治以降も生糸を生産する製糸業は国産の繭を原料として、主にアメリカ向けの輸出産業として規模を拡大した。日清戦争後にはさらなる成長を遂げ、日本の資本主義社会の確立に製糸業は大きな役割を果たす。製糸業を支える養蚕農家は昭和4年（1929）には国内で約221万戸、これは当時の全農家の約4割に近い数字である。

養蚕農家にとって、蚕の飼育がうまくいかず、いかないかは収入の多寡に関わる問題である。だから養蚕豊作を祈る信仰が生まれた。天保8年（1837）に上萩原村（甲州市）の宮下良弥が著した『養蚕秘録』は、須弥山の蚕宝星が衆生を憐れむあまりに繭を作ったという天竺の伝説を引く。そして、養蚕は神星の「御体」を養うに等しいので、おそらくすべからずと具体的な養蚕方法について述べる。生き物を扱うのであるから、養蚕は人間業を超越した要素もあると考えられた。そこで人々は、神道からは『古事記』『日本書紀』に登場する神々、仏教からは馬鳴菩薩や馬頭観音、そして蚕影神・衣襲明神・オシラ様など、さまざまな神仏に養蚕の守護を願ったのである。



4右左口養蚕関係資料－3山梨県蚕業試験場卒業記念アルバム

個人蔵

昭和9年（1934）

蚕の「電気孵化」実習の様子。明治以来、養蚕に科学的手法が試みられるようになった。養蚕の近代化がはかられたわけだが、大正・昭和初期の養蚕全盛期には蚕神への信仰も盛んだった。

養蚕と生活

谷村（都留市）とその周辺の郡内、それから南の上郡内、河口湖から西の西方、上郡内の東の山方の各地域は寒冷で農業にあまり向かないと、江戸時代の文書類にしばしば書かれている。人々は主に養蚕と絹織物生産で生計を立てていた。その収入で、甲斐国中や伊豆・駿河より食料品・塩・茶などを買い入れて生活している村もあった（宝暦13年〔1763〕「甲斐国都留郡松山村明細帳」）。享保年間（1716～36）に甲斐を巡査した村上某は郡内について、「田が少なく畠は地味が悪いので山畠が多い。石高のわりには人口が多く、人々は桑や漆を栽培し、養蚕を営んで暮らしを立てている」と述べている（『甲州嘶』）。

郡内地域は古くから郡内織の産地として知られている。すでに江戸時代初期には絹を年貢として納めていた。また、オランダの貿易船がもたらしたベンガル産の絹織物・海氣は、寛文年間（1661～73）に郡内で模造されたという。その郡内海氣は全国的に流通し、明治20年代からは「甲斐絹」と呼ばれるようになる。絹の原料を調達するために、村々では養蚕に精を出す。桑の栽培が史料上に現れてくる時期から、養蚕も江戸時代初頭には行われていたことが分かる。養蚕は絹織物生産と結びつき、村々の生活を支え、人々は養蚕の繁盛を祈るようになる。

明治以降、生糸生産が産業として成長、近代的な製糸工場が出現する。蚕の飼育法や養蚕道具にも改良が加えられ、風穴を利用した蚕種の貯蔵も行われた。養蚕は大正・昭和初期には最盛期を迎える。戦中・戦後は食糧難で桑園を畠に変えたりしたことから、養蚕が衰退してしまった地域もあるが、昭和40年代まで行っていたという所もある。



16富岳風穴内蚕種冷蔵庫絵葉書

個人蔵
昭和11年（1936）
青木ヶ原にある風穴のうち、最大の富岳風穴（富士河口湖町精進）も江戸時代以来、蚕種の貯蔵に利用されてきた。

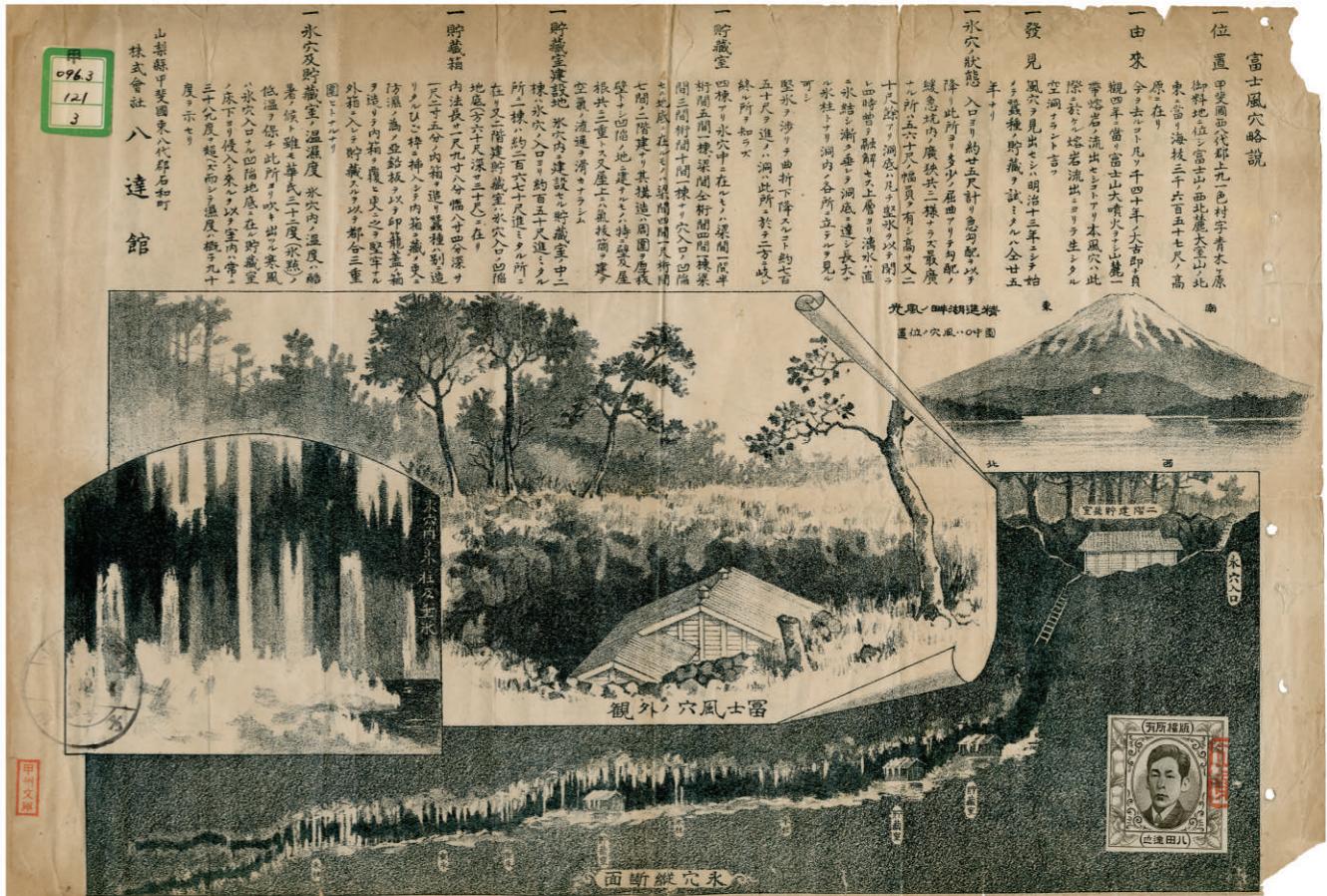


富士風穴

富士河口湖町精進
明治13年（1880）、明治天皇の巡幸に先立ち、天然氷を献納しようと搜索したところ発見されたという。しばらくは氷を採取する場所となつた。蚕種の貯蔵業務を始めた後は、開口部に事務所や従業員の宿舎があつた。

元土佐藩士がみた郡内の産業

池川春水は土佐藩の下級武士の次男に生まれたが、医学の道を志し、江戸へ出て開業した。しかし、盜賊に一切を奪われ、安房国和田村（千葉県南房総市）へ移る。明和5年（1768）に須走口から富士登拝を果たし、吉田口に下り、谷村（都留市）を経由して大月から甲州道中を帰つた。この時の紀行文が『富士日記』である。春水は産業に関心があつたらしく、末尾に「郡内蚕の法糸取次第」を記した。蚕種は上州より買つてること、それを衣類に包み温めて孵化させていること、そして掃き立てから上蔟までの過程などが詳しい。さらに繭から糸を取るときは、慎重にむらのないようにしているなどと、この地域の特徴的な糸引きの技術について述べる。郡内地方で蚕糸がいかに生業として重要な印象に残つたのであろう。



15「富士風穴略説」

明治36年（1903）以降

石和町（笛吹市）の蚕種業者・八達館が発行した富士風穴の案内。風穴の入口はくぼんでおり、そこに2階建ての蚕種貯蔵室が建てられていた。風穴内に入ると約7m50cmは下り坂で、入口から約45mの所に2棟、約80mの所に1棟の貯蔵室があつた。図からは氷柱が並ぶ風穴内の様子がよく分かる。蚕種は湿度から守るために亜鉛版を用いた3重の箱で保存された。

富士風穴の利用～蚕の卵を保存する～

蚕を飼うには、蚕の卵（蚕種）を用意しなくてはならない。蚕蛾から自家で取る家もあったが、甲斐の村々ではその卵を貼り付けた種紙を、古くから信濃や奥羽などから手に入れた。明治以降は信濃産を多く買ったという。村々を回る種紙の業者から買う場合が多かったが、上郡内から甲府や谷村に買いに行く者もいた。後には養蚕実行組合に注文して、共同で孵化した蚕を入手することもあった。種紙はそのまま置いておくと、桑が葉を付ける前に孵化してしまうことがあるので、その保存方法が問題となる。また、あえて孵化を遅らせ、養蚕を都合のよい時期にずらし、繭の収量の増加を試みることも行われた。そのため蚕種を冷暗な洞窟で保存する方法が編み出された。長野県では早くから行われ、山梨県では明治10年（1877）、菱山村（甲州市）の三森忠左衛門が村内の「風穴」で初めて蚕種を貯蔵した。同13年に上九一色村（富士河口湖町）で富士風穴が発見されると、25年から蚕種の貯蔵を試みる者が出て、33年に石和（笛吹市）の蚕種業八達館の経営者・八田達也に引き継がれる。風穴内の貯蔵室の温度は常に3～5度に保たれており、蚕種の保存には最適だった。山梨県内はもとより、東北から九州に至る多くの県から蚕種保存を受託する。最盛期には42万枚の種紙が貯蔵されていたという。明治40年には近辺の鳴沢氷穴（鳴沢村）でも、瑞穂村（富士吉田市）の富士天然風穴会社が蚕種を保存するようになった。蚕種を運搬する馬の行列から、現在の国道139号は「種しおい街道」と呼ばれたという。

浅間神社に養蚕繁盛を祈る

神奈川県鐘ヶ嶽にある七沢浅間神社（神奈川県厚木市）は古くから養蚕・子宝・安産に靈験あらたかとされていた。養蚕については江戸時代末期、祭神の木花開耶姫命を蚕神とし、相模や多摩の養蚕が盛んな地域からの信仰を集めた。北口本宮富士浅間神社や下吉田の小室浅間神社（ともに富士吉田市）でも「養蚕守護」のお札を出している。北口本宮の5月5日の例大祭（お初申）には、養蚕の準備をひかえた人々がお参りに来た。大正（1912～26）の頃の大石村（富士河口湖町）では、「浅間様には蚕の神さんが祀られている」として参詣し、お札を受けた。境内にはザルや柔切り挟みなどの養蚕道具が売られていたという。旧宝村中津森（都留市）でも、浅間神社を養蚕の神ととらえ、参詣の土産に、米の粉に色を付けて花の形にして竹串にさしたミョウキバナ（御幸花）やカヤタンキリ（萱瘞切）などを買ったという。

また北口本宮では寒の入りから最初の申の日に寒申祭（お寒申）を執り行う。これは、養蚕守護の祭りとして、郡内や西八代郡から多くの参詣者を集めた。参詣者は馬のわらじを境内の神馬舎に二つ供え、一つを持ち帰り蚕室の入り口につるす。こうすると蚕があたると信じられた。さらに神馬が刷られた養蚕守護のお札も配られた。馬が蚕を守護するとされたのは、オシラ神信仰が影響していると考えられる。



オシラ神の物語

富士吉田市や南都留郡では蚕のことを「オシラサマ」とか「オシラサン」と呼ぶことが多い。これは養蚕の起源に関わるオシラ神の物語が影響しているとみられる。それは、娘が馬に恋をして、怒った父親が馬を殺し、皮をはぐ。悲しむ娘はその馬の皮に包まれて天に昇り蚕になったという内容である。この物語は中国の小説『搜神記』（4世紀成立）をルーツにして日本に伝わり、東北地方ではオシラ神信仰と結びついた（オシラ神は男女一対の桑木の像として表現される）。養蚕の起源を語る伝説はさまざまであるが、いわゆる「馬娘婚姻譚」は日本でも広まった。似たような話は、「（蚕の）神様は女人の人で、（埋まっている）娘が馬に踏まれたならば、化けてオシラ様になった」（『古原の民俗』）などと、養蚕にまつわる伝承として伝わっている。

蚕の神仏

養蚕には桑が必須である。桂川の流域では、江戸時代にたびたび養蚕の「不作」に見舞われたことを伝える史料が散見できる。例えば、文化5年（1808）は天候不順で桑不足になり、蚕が黒く腐り死滅、運よく育った蚕でもよい繭を作らなかったという（『富士吉田市史史料編 第3巻』）。江戸時代中期には全国的に気候が寒冷となり、季節外れの霜で桑が枯れ、蚕が全滅することもあった。そのような時、蚕はまとめて川に流されたり、土に埋められたりした。享保19年（1734）には、霜枯れによる桑不足で、養蚕に従事していた農家の女性は皆、途方に暮れて病人のように寝込んでしまったといわれる（『都留市史資料編 古代・中世・近世I』）。このような状況を回避するため、人々は蚕の無事、養蚕の豊作をさまざまな神仏に祈った。

蚕を埋めた場所には蚕影神（p10）やオシラ神（p7）を祀る場合が多かった。富士吉田市大明見の小室浅間神社の背後には、桑の霜害で死んだ蚕を埋めたという場所に石祠がある。5月上旬、年配女性が弁持参で祠の前に集まり念仏を唱えるという。このような石祠を蚕影神社と称している所もあり、蚕影神とオシラ神の信仰が結びつけられている場合もある。西方の鳴沢村には「蚕神様は桑の葉を持って日本に来た女神様で、十月の十日夜に天に昇る」という伝承がある（『鳴沢村誌 第1巻』）。山梨県内では甲府市太田町の稻積神社、南アルプス市高尾の穂見神社、笛吹市石和町松本の「お天狗さん」、中央市大鳥居の山神社なども養蚕農家の信仰を集めた。

幕末の鳴沢村では、蚕おこしの日に蓮華寺（富士河口湖町大嵐）の法印に祈禱してもらったという日記の記述がある（『鳴沢村誌 第1巻』）。仏教も養蚕守護にご利益があると考えられた。都留市域では蚕の時期になると、ホウエンサン（御嶽堂）が村々を養蚕祈願のため拝んで回ったという。養蚕満足のお経をあげることもあったと伝わる。日蓮宗の七面山と関連する七面様も蚕の神として祀られた。旧戸沢村（都留市）の浄土真宗正蓮寺の池から光る石が出て、それをオシラ神として祀ったという伝承もある。さらに笛吹市春日居町鎮目の真言宗寺院・長谷寺の本堂には馬鳴菩薩が安置されている。馬鳴は2世紀頃のインドの仏教詩人であるが、死後、中国では蚕神の性格が付与された。12世紀頃、日本の密教寺院に衣服を施す仏として伝わり、養蚕の守護にも効験があるとされた。



蚕神祠（左）・蚕影碑（右）

小室浅間神社（富士吉田市大明見）
祠の方は死んだ蚕を埋めて祀ったものとみられる。碑の方は茨城県つくば市の蚕影神社の信仰（p10）によるものであろう。

寒さで枯れかけた桑

大月市猿橋町小沢
霜で桑が枯れてしまうと、養蚕農家は大打撃を受けた。生物である蚕が無事に繭を作るよう人々は神仏に祈った。



17馬鳴曼荼羅

長谷寺蔵（笛吹市春日居町鎮目）

江戸時代

長谷寺は本尊を十一面観音とする真言宗寺院で、かつては甲斐国の三昧場（さんまいば、死者の冥福を祈る堂）として「菩提千坊」と呼ばれるほどの威容を誇った。本堂には十一面観音のほか、脇侍（わきじ）の不動明王・毘沙門天、それに薬師如来や馬鳴菩薩などが安置されている。馬鳴菩薩は、説法が巧みで馬が鳴いて感動したとの中国の説話がその名の由来となっている。また裸の衆生（しゅじょう）のために衣服をつくると誓願を立てたとも伝わる。そして馬と蚕との深い関係（p7）ともあいまって蚕の神とされた。写真は馬鳴菩薩を本尊とする馬鳴曼荼羅である。馬鳴は馬に乗り、六臂の半跏像として表現されている。馬の口を取るのは2体の蚕室童子、向かって左端で合掌しているのは啓請（けいせい）童子、右端と蚕室童子の後ろは蚕命・蚕印・蚕母の各童子である。中国の養蚕信仰が日本に取り入れられた姿である。



ダンゴバラ

丹波山村丹波
左が蚕、右が木の実の豊作を祈って、マユダマ（繭玉）を挿して飾ったダンゴバラ。ダンゴバラは豊かな実りの予祝を表している。

養蚕と小正月

山梨県の小正月行事では、繭の形をした団子を木の枝に挿してダンゴバラを作り飾ることが広く行われる。これには養蚕の豊作を願う意味合いがあった。山中湖村山中では繭団子を挿す木に、桑を添えて「桑神様」に桑と繭の豊作を祈ったという。ダンゴバラを片付けるとき、団子を枝から抜き取る作業を繭搔きとか繭取りといって、養蚕の作業に例えることも行われる。生のうどんをダンゴバラにかけて垂らす、もしくはうどんと繭団子と一緒に食べる所もある。うどんを蚕がはく糸に見たてているのである。

～蚕影神と金色姫伝説～

蚕は繭を作るまでに4回脱皮する（下の「表」参照）。富士吉田市新屋では1眠を「シシニトマル」、以下4眠まで、「タケニトマル」「フナニトマル」「ニワニトマッタ」という（『新屋の民俗』）。この言い方は、他の地域でも広く見られ、漢字ではそれぞれ「獅子」「鷹」「舟」「庭」にとまることとなる。これは、金色姫の受難の物語を反映している。文化13年（1816）に竹森村（甲州市）の萩原治兵衛が著した『養蚕育伝書』は、蚕の由来について次のような伝説を載せる。「昔、北天竺の霖夷大王には金色姫という姫君がいた。継母は姫と折り合いが悪く、姫は4回の難行を受ける。哀れんだ大王は姫を桑のうつぼ船に乗せて海に流した。そして欽明天皇（在位539～571）の時代、姫は常陸の筑波山麓に流れ着き蚕に変身、そして蚕影大権現として祀られた。」4回の難行とは、以下の通り。

- ①継母は、猛獸がたくさん住む獅子吼山へ姫を捨てさせた。しかし、獅子は姫に危害を加えず、背に乗せて宮殿まで送り届けた。
- ②継母は、一年中雪が降り、鷹・鶲・熊が多くいる鷹群山に姫を捨てさせた。しかし、大王が鷹を捕るために遣わした家来が姫を見つけ、宮殿に連れ帰った。
- ③継母は、海眼山という離れ小島へ姫を流した。しかし、風で漂着した釣り舟が姫を見つけて連れ帰った。
- ④継母は、大王の留守に庭に穴を掘らせ、姫を埋めてしまった。大王は姫が行方不明になり悲しんでいたが、あるとき地中から光が発せられ、その場所を掘ったら姫が現れた。

この金色姫伝説にみられるような「継子譚」は「馬娘婚姻譚」（p7）とともに、日本では養蚕の起源伝説として語られる。山梨県では継子譚の方が多いようである。

金色姫伝説は茨城県つくば市の蚕影神社の縁起に取り入れられた。この蚕影信仰は東北地方南部から関東甲信で養蚕が盛んだった江戸時代後期から昭和初期までの間に広まった。流行神としての性格もあったらしい。蚕影信仰の広がりは真言宗蚕影山桑林寺（廃寺、つくば市）が果たした役割が大きい。蚕影神を分霊して祀る場合、桑林寺が出す鑑札が必要とされる。この鑑札は偽物が出回ることもあった。それ程、蚕影神は養蚕に靈験があると思われていた。

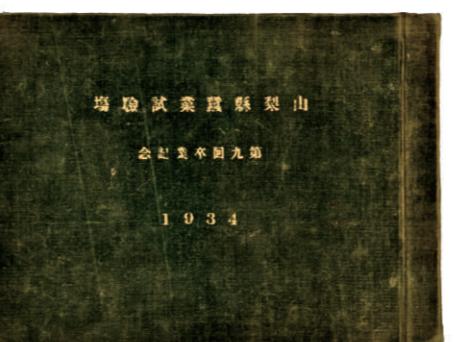
山方の地域にも蚕影神は祀られる。平野村（山中湖村）では文化5年（1808）に養蚕繁盛のため、筑波から分霊を得て蚕影神社を建立した。ただ、養蚕の衰退とともに自然に消滅したらしい。また、内野村（忍野村）にも明治8年（1875）に蚕影神社が建てられた。いつしか祭礼が行われなくなり、昭和3年（1928）に復興のため、村内の浅間神社の境内に移されたという。山梨県内にはいくつか「蚕影さん」の石塔が現存するが、多くは、養蚕の景気がよかつた大正期（1912～26）から昭和初年にかけて建てられたものである。

[表] 蚕の成長

孵化→1齢・1眠	5齢	繭	蛹	蛾
桑を食べなくなり 動かなくなる (眠) →脱皮する	2齢・2眠 ～ 4齢・4眠	この時期は 眠らずに繭を作り始める	ここまで 約1ヶ月かかる	

4右左口養蚕関係資料-3山梨県蚕業試験場卒業記念アルバム

昭和9年（1934）



個人蔵
縦19.1cm×横26.5cm

大正7年（1918）に西山梨郡甲運村（甲府市）で事業を始めた山梨県原蚕種製造所は、同11年に山梨県蚕業試験場と改称する。養蚕教師など蚕業講習生の養成も行った。当アルバムは昭和初期に右左口から入寮して学んだ生徒のものである。蚕業試験場は戦後も存続し、昭和43年（1968）に北巨摩郡双葉町菖蒲沢（甲斐市）に移転した。



3蚕神像

年未詳

個人蔵

全高8.0cm×幅5.4cm

富士吉田市大明見に伝わる蚕神像。普段は神棚に祀られているが、20年ほど前までは小正月にダンゴバラの前に置いたという。舟に乗った女神という姿は、金色姫伝説を受けて女神化した「蚕影山大神」を示している。戦前まで筑波の蚕影神社では、金色姫の小型の銅像を配布した。

中道往還右左口の養蚕信仰

右左口（甲府市）は、甲府と駿河を最短距離で結ぶ中道往還の宿場である。養蚕も盛んだった。ここでは蚕神として五社神社の山にある「馬の権現」を信仰していた。また小正月の1月14日夜に、誰にも見つからないように道祖神といっしょに置いてある石を持ち帰り、蚕室に祀ると蚕が豊作になるという信仰もあった。さらに昭和初期から「蚕影さん」も祀るようになる。右左口では大正頃には、富士風穴（p4～5）に蚕種を保存するようになり、中道往還の右左口峠は蚕種紙を運ぶ馬でぎわったという。筑波の蚕影信仰には、富士山方面から中道往還を伝うルートもあったと推測できる。



（表）

（裏）

4右左口養蚕関係資料-1蚕影山奉納札

個人蔵

（左）平成6年（1994） 縦88.2cm×横8.4cm
（右）平成19年（2007） 縦90.9cm×横8.4cm

右左口の八幡神社境内に祀られている蚕影山は、右左口内の善藤・七覚・宿の各集落の信仰を集めてきた。善藤では4月3日、七覚・宿では同月15日に祭礼を執行する。宿ではくじ引きや相撲大会も催された。写真は蚕影山に奉納して、養蚕守護のお札を貼ったもの。お札は七覚が出した。



4右左口養蚕関係資料-2稻積神社養蚕護符

個人蔵

昭和時代

長さ42.0cm

甲府市太田町の正の木稻積神社は稻荷を祀っている。稻荷は商売繁盛の神だが、衣食住や産業全般の守護にもご利益があると考えられている。5月上旬の祭（「正の木さん」）は、植木市が立つことで有名になったが、写真のような養蚕守護のお札も出していた。右左口の住人が授かったものである。かつては祭で養蚕道具を売っていた可能性もある。

～木食白道と円通寺の馬頭観音～

養蚕の信仰には仏教も関わった。ここでは二つの事例をみてみよう。

山梨県上野原市ハツ沢に、蚕守護のお札を印刷するための版木が伝わっている。市の文化財に指定されている、作者は木食白道である。宝暦5年（1755）、上萩原村（甲州市）に生まれた白道は、安永2年（1773）、伊豆にて木喰行道から木食戒をうけ、ともに関東・東北・北海道を修行して回った。寛政9年（1797）に上野原を訪れ、井戸の掘削にあたり水が湧くように祈禱する。この時、恵比寿と大黒天の木像も作った（ともに上野原市指定文化財）。同12年頃からは信濃の伊那地方に滞在するが、文化元年（1804）頃から清水入（大月市富浜町鳥沢）に草庵を結び終の棲家とする。上野原には蚕種石の伝承がある。気候が暖かくなり、蚕種石に生える苔が青くなるころに蚕を孵化させると豊作になるという。白道はこのような地域の養蚕信仰をふまえて、蚕守護の版木を彫ったのだろうか。

静岡県駿東郡小山町新柴にある曹洞宗円通寺は、応永年間（1394～1428）、小栗判官助重の愛馬・鬼鹿毛の菩提を弔うために建てられたという由緒を持つ。本尊は馬頭観世音である。幕末頃から馬屋祈禱の寺として知られるようになり、戦後も4月18日の大祭には農耕馬とその飼い主、博労などが参詣した。上郡内の新屋（富士吉田市）などからも馬を飼っている家や養蚕農家が馬を連れて参詣したという。オシラ神信仰（p7）と関わるとみられ、馬頭観音に祈ると無事に上族（蚕を木にとまらせて繭を作らせること）出来るとされた。円通寺の住職は昭和初期まで毎年、神奈川・静岡・山梨の各県を馬屋祈禱のために回った。山梨県には5月から6月にかけて南都留郡や富士吉田市・都留市、そして大月市笛子町あたりまで足を延ばし、家々で馬の安全と養蚕繁盛を祈願した。新屋では馬小屋の前で経を読み、「家内安全・養蚕満足・無病息災」と書かれたお札を置いていったという。昭和30年（1955）頃から、馬屋祈禱は下火になるが、現在でも運送会社や牧場、競馬関係者などの信仰を集めている。

小栗判官と鬼鹿毛の物語

曹洞宗和泉山円通寺の創建は小栗判官の伝承と関わっている。室町時代、相模の武士・横山前生は「鬼鹿毛」と名付けた馬を飼っていたが、大変な暴れ馬で困っていた。そこで鬼鹿毛を乗りこなせる者には、鬼鹿毛と美貌で名高い養女・照天姫を与えると、乗り手を募った。小栗家の再興を願っていた判官は、鬼鹿毛に乗った状態で碁盤の上に乗るという馬術を見せる。この時、判官は日頃から信仰している「觀世音菩薩」を心に念じたという。やがて、判官が西に向かう旅の途中、新柴で鬼鹿毛が死に、この地に菩提を弔うために堂宇を建てた。これが円通寺のルーツとされる。



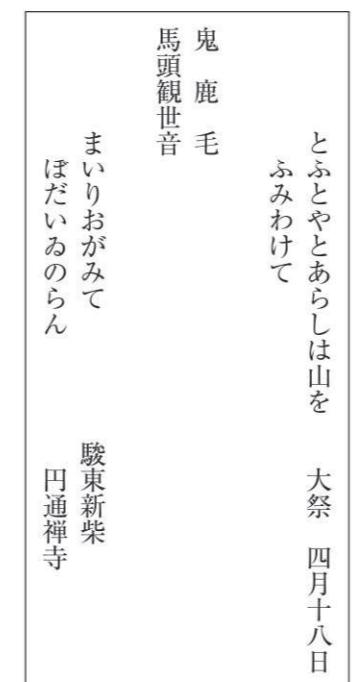
和泉山円通寺

円通寺は、寛文2年（1662）に竹之下村（小山町）の宝鏡寺住僧の容国が、曹洞宗寺院として中興したと伝える。もとは鮎沢川の西岸にあったが、元禄16年（1703）の大地震で被災し、現在地に移った。大祭は4月18日（現在は17・18両日）に行われ、かつては農耕馬を連れた飼い主、馬の仲買をする博労などが参詣したが、現在では家内安全・交通安全を祈願する。9月18日には小祭として畜靈施餓鬼会（せがさえ）が執行される。



5木食白道作蚕守護版木

上野原市指定文化財 個人蔵
江戸時代（18～19世紀） 縦27.0cm×横15.5cm
蚕守護の護符を刷るための版木。中央に日輪を頂いた觀音、版木の左上には「蚕守護」、右に「甲斐之木食」、左下に「白導」とある。作者の木食白道は寛政9年（1797）に、上野原を訪れ、住人が水に困っていたことから、井戸が通ずるように祈禱し、工事が終わるまで滞在したという。後、文化元年（1804）頃から死亡する文政8年（1825）まで清水入（大月市鳥沢）に住む。



6円通寺鬼鹿毛馬頭觀世音護符

個人蔵
年未詳 縦32.9cm×横11.9cm
円通寺の本尊の馬頭觀世音は、小栗判官助重の愛馬の伝承から、「鬼鹿毛馬頭觀世音菩薩」と称する。牛馬の供養・安全に願があると考えられ、養蚕の起源伝説と馬の関わりから養蚕守護の神ともされた。その信仰は山中湖・忍野両村の富士の根方から下郡内にまで広がり、大祭に参り護符を受けてくる養蚕農家もあったという。



7荒止馬觀世音菩薩絵像

個人蔵
昭和7年（1932） 縦82.2cm×横26.8cm
東桂村十日市場（都留市）の永寿院から昭和7年（1932）9月、牛馬商組合が授かったもの。馬頭觀音が描かれているが、新柴円通寺の一面二臂の鬼鹿毛馬頭觀世音とは姿が異なる。永寿院は空海が開祖と伝えられるが、画には建久4年（1193）、源頼朝が富士の巻狩の際、馬が衰えないように祈願した跡であることが記されている。馬の守護の伝説から新柴円通寺の馬頭觀音が結び付けられたのであろう。なお、円通寺鬼鹿毛馬頭觀世音護符とともに上部には富士山が描かれており、富士信仰との関わりもうかがわせる。



三ツ峠の「お猫さん」

蚕の起源に馬が重要な役割を果たしている話があるように(p7)、養蚕信仰に関わる動物はいくつかいる。都留市上暮地に祀られた「コカゲサン」の祭礼では、戦前まで布で作った猿を一つもらって帰り、翌年に二つにして返したという。また、蚕の大敵・ネズミの害を防ぐため、猫、蛇、ムカデをネズミ除けのまじないに使うところもあった。

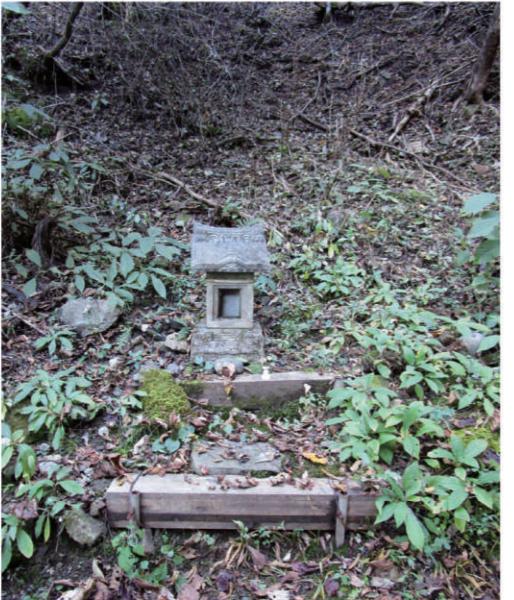
富士吉田市上暮地の白糸の滝は三ツ峠山から南に連なる山塊に源を発する殿入川の上流にある。滝を正面から眺められる場所には四阿があり、その左奥に鎮座している石祠が蚕影神社(白糸神社)である。ここに祀られている神はオカイコ神様ともオシラ神様とも蚕影様ともいいう。かつては滝付近の洞窟に祠があり、瀬戸物の招き猫がお供えされていた。4月15日の祭日にはここに参り、その招き猫を借りて、蚕があたると2匹にして返した。この瀬戸物の猫は「お猫さん」と呼ばれ、10cmくらいのものが下吉田(富士吉田市)で売られていたといいう。

上暮地の北に隣接する西桂町下暮地では、5月5日の三ツ峠山頂上にある神鈴權現の祭りで「お猫さん」のお札を配る。お札の版木は下暮地の宮司が保管し同地の自治会で刷る。お札を蚕室に貼って、ネズミ除けのまじないとした。三ツ峠山は甲府盆地東部からは猫がしゃがんでいたり、寝ていたりする姿に見えるといいう。御坂峠から近いこともあり、藤野木・二之宮(笛吹市御坂町)あたりの養蚕農家が「お猫さん」を請けていた。

三ツ峠山は、空胎上人が江戸時代後期から幕末にかけて靈場として整備したことが知られる。空胎は相模の觀音寺(神奈川県厚木市)で修行したが、ここの勢至堂には廃寺となった禪法寺の道具が納められている。禪法寺は七沢浅間神社の別当(神宮寺)であった。七沢浅間神社の木花開耶姫命は蚕神として信仰され(p6)、三ツ峠山を中心とする養蚕信仰に関わりがあるのかどうか、興味は尽きない。



白糸の滝



蚕影神社

富士吉田市上暮地

かつては滝の上方の洞窟に蚕影の祠が祀られていって、たくさんの招き猫があったといわれている。現在の蚕影神社は滝の展望所の左奥にある。滝へ至る山道には三十三觀音の石像があり、蚕影神との関係が気になるところである。付近は山岳宗教の修行場ともいわれ、蚕影神が祀られる以前からの聖地であった。戦前までは4月と9月の各15日に祭りが行われ、特に4月のそれには、忍野村や道志村の養蚕農家も参詣したと伝わる。



浅間諏訪神社

西桂町下暮地

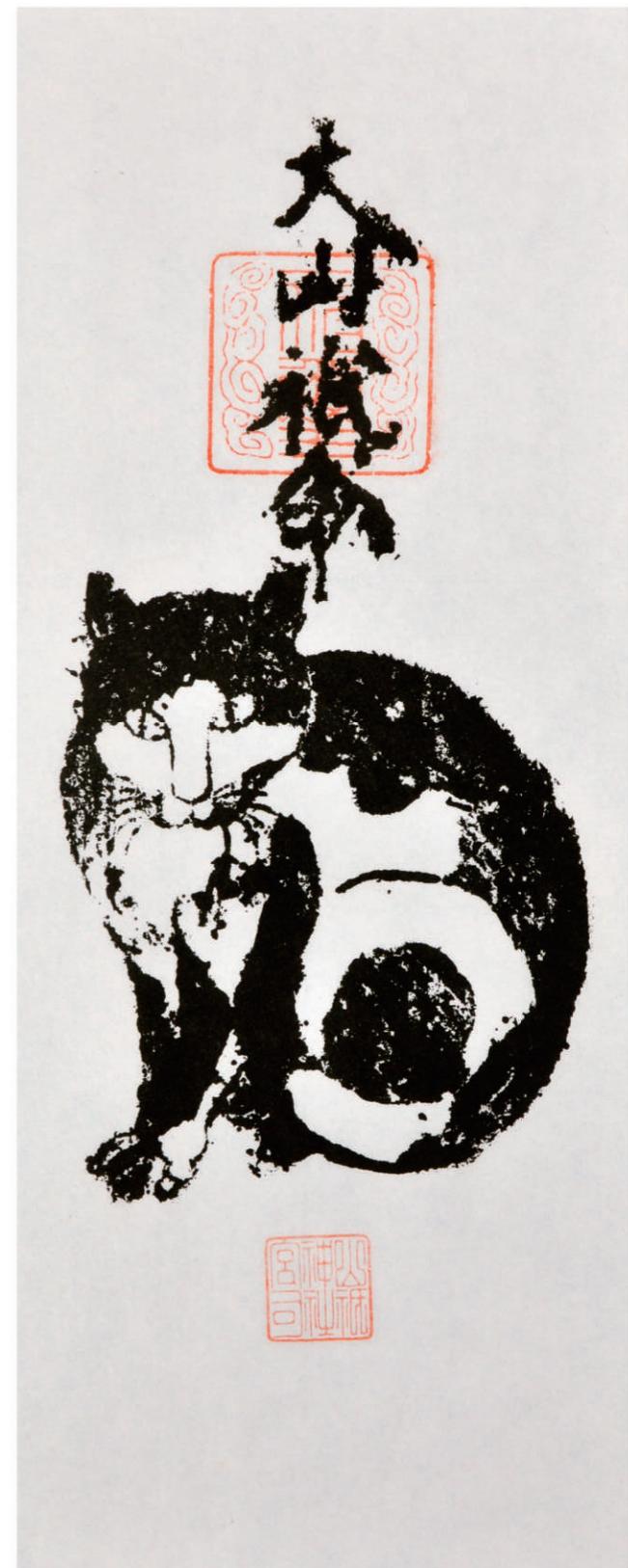
三ツ峠山頂上の神鈴權現では5月5日に祭りを執行し、「お猫さん」の護符を配るが、その版木を所有するのが下暮地の神職である。神鈴權現は蚕神としての一面を持つ。



山祇神社

西桂町下暮地

三ツ峠山の守護神として山の神(大山祇命)を祀る。現在では浅間諏訪神社の宮司が兼務している。本殿石畳の両側に丸石を供えて蚕の無事を祈ったとされる。



8「お猫さん」護符

年未詳

個人蔵

縦31.9cm×横12.5cm

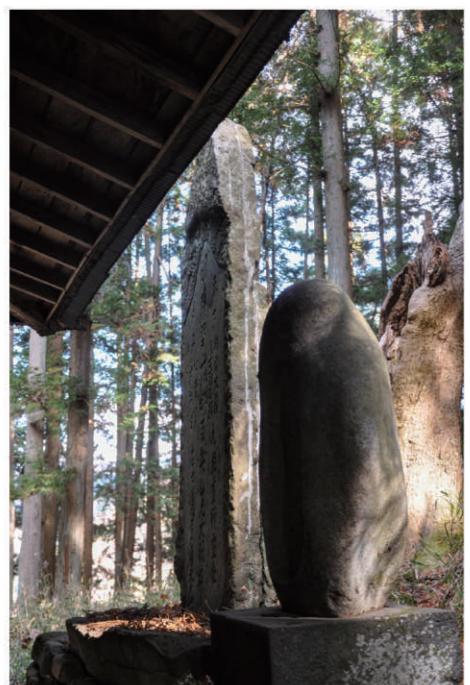
江戸時代後期には、ネズミ除けのまじないとして「猫絵」を室内に貼ることがあった。養蚕農家ではネズミが蚕の大敵であることから猫が蚕の守護神としてとらえられた。護符に書かれている大山祇命(おおやまつみのみこと)は山を守護する神であるが、神鈴權現の信仰と結合している。

富士講と結びつく蚕神

筑波の蚕影神社の縁起には、霖夷大王の娘・金色姫が日本に来たときに欽明天皇の皇女となり、養蚕の神になったという話が載る。そして金色姫は富士山に飛んで来たという話が加わる。金色姫の魂は左右に富士山と筑波山の神を配置して蚕影山権現と号すようになり、これが蚕影神社の始まりとされる。この縁起は慶応2年（1866）、蚕影山桑林寺の由緒をもとにしている。木花開耶姫命が蚕神とされたように、富士信仰と養蚕信仰は結びつきが強く、そして各地に広まってゆく。

大月市猿橋町小沢の田中には二つの石塔が並ぶ所がある。一つは文政12年（1829）に「郷中」が建てた蚕養塔、隣は慶応4年（1868）の富士講碑である。富士講碑は「郷中村上同行」が建てたものである。北口本宮浅間神社の大鳥居などを修復した村上光清の法脈を受け継ぐ富士講がこの地域に広がり、村上派12世の村上（藤原）徳永の影響を受けて造立されたことが分かる。江戸時代半ばからの気候寒冷化で、蚕は度々ダメージを受けた（p8）。富士講碑は死んだ蚕を供養するために、前からあった蚕養塔の隣に建てられ、合わせて蚕神としてノボリ4ヶ村（田中・幡野・小沢・朝日小沢、いずれも大月市猿橋町）で信仰された。お堂の前を通る道は富士へ向かう古い参詣道とみられる。

甲府盆地には湖水伝説がある。そして盆地の湖水を抜いて甲斐国を開いた土木昆古王の孫・藤巻姫が養蚕を伝えたという伝説もある。藤巻姫は米倉山（甲府市下向山町）に諱訪大明神として祀られ、治水・稻作・養蚕の神ともいわれる。その米倉山の東、下向山町金沢には富士塚が祀られ、寛政元年（1789）の石碑が建つが、その隣に明治29年（1896）、蚕神の石祠が置かれた。米倉山頂からは富士山の頂上をわずかであるが望むことができる。富士山の遙拝所とも考えられ、ここでも富士と養蚕の信仰の関連が推察される。

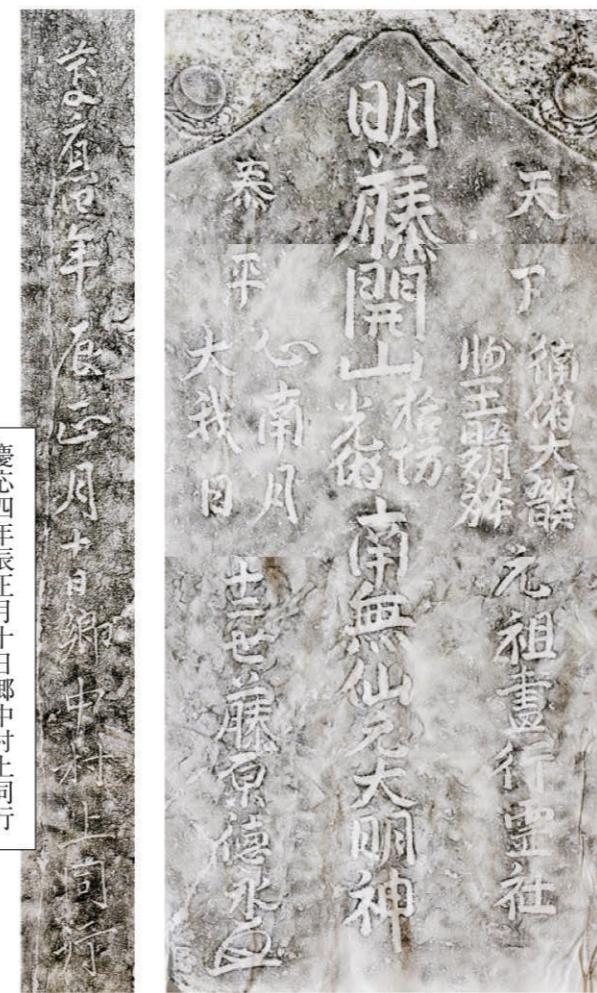


富士講碑（左）・蚕養塔（右）



富士講碑・蚕養塔付近の様子

中央やや左側、堂の背後に富士講碑と蚕養塔が並ぶ様子がみえる。近くには、文化3年（1806）の銘がある百番供養塔が建つ。手前から堂の前を通って奥へ延びる道は、峠を越えて朝日曾離（あさひそし、都留市）に通じる古い富士参詣の道の一つである。



慶応四年辰正月十日郷中村上同行

（側面）



石祠（左）・蚕神祠（右）

甲府市下向山町金沢

富士塚の頂上に並んで建つ。左側の石祠には「当村中」「願主出月氏」と刻まれている。村講の造立と推測される。右側が蚕神祠で、明治29年（1896）5月7日に祀られた。石工は西八代郡落居村（市川三郷町）の上田由太郎である。富士信仰の場に蚕神を据えたことになり、富士と養蚕の信仰の結合がみてとれる。



10蚕養塔拓影

原碑造立：文政12年（1829）

碑面：全高81cm×全幅51cm

蚕養塔は小沢村田中の「郷中」が建てた。碑面が繭玉を思わせる形になっている。



富士塚

甲府市下向山町金沢



蚕神祠拓影（部分）

破風の正面に繭玉を縦に2つ並べた神紋を彫刻する。

～小永田浅間神社の祭祀～

山梨県北都留郡小菅村は東京都の奥多摩町に隣接する山間の村である。江戸時代から明治にかけて青梅・冰川（奥多摩町）経由で小菅村の白沢に泊まり、富士を目指す道者が多く通った。白沢の先、佐野峠の登り口では奈良倉山から流れ出る水で顔や手を清めたという。また村内には富士講が建てた「八嶽供養塔」（富士講碑、天保11年〔1840〕）と「八嶽仙元塔」（同13年）があり、富士信仰が盛んな村である。

小菅村の享保15年（1730）の明細帳には、桑は少々作っているが養蚕はしていないとある。桑は他村へ売り出すこともあったが、寒冷で養蚕には向かなかった。しかし、幕末から生糸が主力輸出品になると、養蚕が盛んになり、糸を横浜に出していたという。繭の産出は大正（1912～26）頃が最盛期で、昭和39年（1964）には激減した。

小菅村の南部、小永田地区には浅間神社がある。文化元年（1804、天保元年説もある）、当所の権兵衛が鶴根山より「御鏡」を発掘、室を作り御室浅間（仙元）と号して祀ったのが始まりとされる。昭和7年（1932）に移転し、小永田地区一同が中心となって拝殿を新築した。例祭は5月5日に執行され、「神代神樂」が舞われる。かつては大月市七保町、上野原市西原、奥多摩町小河内など各方面から参詣があり、露店も出たという。祭礼には4種類のお札が配布される。①大黒天の絵像の他、②安産祈願、③家内と養蚕の安全祈願、④蚕神の絵像の各札である。富士信仰と養蚕信仰が深く関わっていることが分かる。



御室浅間（仙元）神社

小菅村小永田

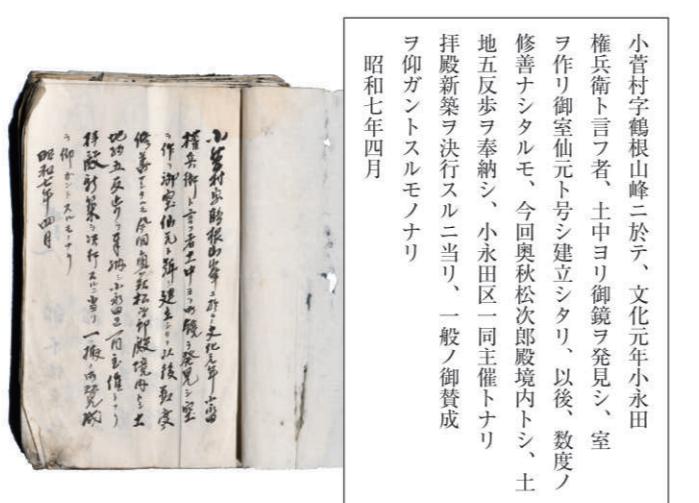


「御室仙元新築神燈銭名簿」

小永田浅間神社役員会蔵

昭和7年（1932）

昭和7年4月、5反の土地の奉納により、小永田地区一同が主催して拝殿を新築した。この時の寄付金（「神燈銭」）名簿。冒頭に神社の由緒が記されている。



小菅村字鶴根山峰ニ於テ、文化元年小永田
権兵衛ト言フ者、土中ヨリ御鏡ヲ發見シ、室
ヲ作り御室仙元ト号シ建立シタリ、以後、數度ノ
修善ナシタルモ、今回奥秋松次郎殿境内トシ、土
地五反歩ヲ奉納シ、小永田区一同主催トナリ
拝殿新築ヲ決行スルニ当リ、一般ノ御賛成
ヲ仰ガントスルモノナリ
昭和七年四月



11小永田浅間神社祭祀資料-1 護符入木箱

年未詳

5月5日の祭礼で配布する護符を入れる箱。蓋には「八嶽御札」とある。中は4種類の護符と繭玉がそれぞれ区画されて納められている。繭玉は祭礼の時にお札にそえて配布されたものとみられる。



小永田浅間神社役員会蔵

縦58.6cm×横37.4cm×高さ9.0cm



11-2 蚕神護符版木

年未詳 縦31.8cm×横14.0cm

桑を持った女神として表現されている蚕神の護符。



(左下) 11-3 蚕神印章

年未詳 縦6.0cm×横6.0cm

蚕神護符の下部に朱で捺す「蚕神」の印章。



11-4 養蚕家内安全護符版木

年未詳 縦36.1cm×横10.5cm

小永田の浅間神社が養蚕信仰を集めていたことを示す。



11-5 安産護符版木

年未詳 縦30.5cm×横10.1cm

祭神の木花開耶姫命は安産の神でもある。



11-6 大黒天護符版木

年未詳 縦14.8cm×横10.6cm

大黒天は五穀豊穣の神である。



11小永田浅間神社祭祀資料

小永田浅間神社役員会蔵

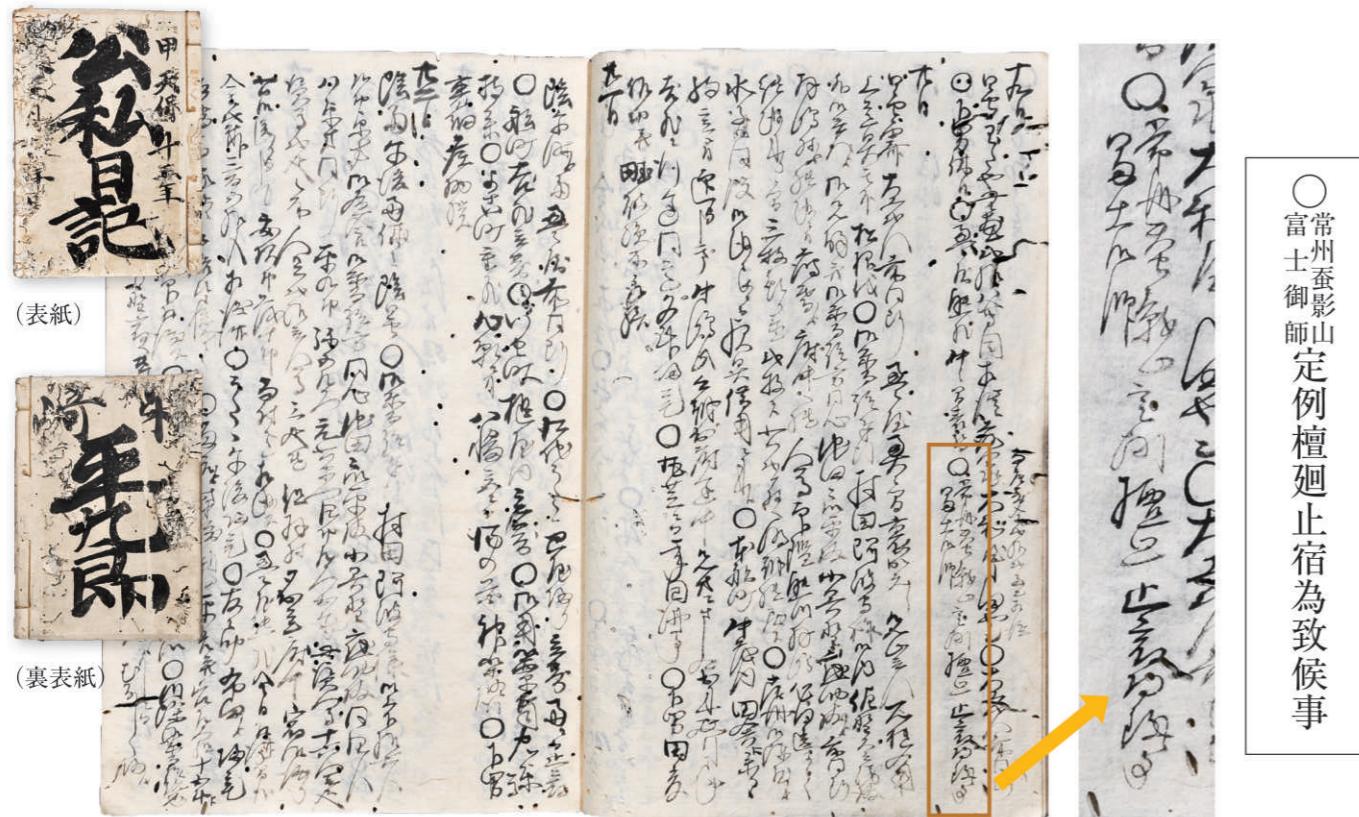
浅間神社は昭和7年（1932）に小永田地区一体となつて拝殿が新築された。その工事で働いた人足を書き留めたものと、祭礼費用の寄付を記した帳面が残る。祭礼費用に関するものは、昭和9年から現代に至るまで継続して記録されている。

～多摩と諏訪～

富士道者に宿を提供し、祈祷もした吉田の御師は、登拝のシーズンオフに村々の旦家を廻る。吉田御師の場合、武藏・相模・上総・常陸といった関東地方に旦家がいた。御師は旦家に富士山牛玉札などのお札を配り、初穂（お布施）を受ける。お札は他に富士信仰に関わる神仏の御影などがあったが、「富士山養蚕倍増」といったお札を自家で刷る御師もいた。

武藏国多摩郡柴崎村（東京都立川市）の村役人・鈴木平九郎は、天保8年（1837）から安政5年（1858）にかけて「公私日記」を残す。柴崎村は養蚕が盛んで、鈴木家も桑の栽培から蚕飼、糸操り、絹織りまで営んでいた。村では小正月につくった繭玉の近くに蚕影山の掛軸を飾る。3、4年に1度は泊まりがけで常陸の蚕影神社まで参詣するといった信仰があった。また、「公私日記」には「富士御師」の旦家廻りの記事がある。例えば、天保15年2月19日に「常州蚕影山」「富士御師」が定例の旦那廻りに来て宿泊した、とある。御師が蚕影神信仰を取り込んで、富士信仰の布教に努めていたとみえる。

関東以外では、川口（富士河口湖町）の御師が信濃方面へ出向いていた。その影響が富士講を結成することにつながる場合もあった。明治22年（1889）、諏訪郡湖南村（長野県諏訪市）で結成された富士講では、その趣旨は「安産」「五穀宝（豊）熟」「養蚕ノ恵」を祈願することにあった。そして毎年2人の代参を出して、日待も行う。養蚕や製糸業が盛んな当地の住人の願いが、富士信仰に結びついたのである。



18鈴木平九郎「公私日記」(部分) 立川市指定有形文化財 天保15年（1844）個人蔵 立川市歴史民俗資料館保管

鈴木平九郎は武藏国多摩郡柴崎村の村役人。天保8年から子孫の参考にするために日記をつけ始める。その記事には、村役人として村の公用に関わることの他、家族のこと、世間の噂話まで多岐にわたる。天保15年2月19日の記事は、天候は曇り、無尽のこと、下男の休日にしたこと、畠替え、そして富士御師を定例の旦家廻りに際して宿泊させたことが書かれている。「富士御師」と「常州蚕影山」が割書となっているが、蚕影神信仰の伝播に富士御師が関わっていたことが推測される。



富士塚

東京都立川市富士見1丁目
鈴木平九郎が住んでいた柴崎村には富士塚があった。すでに寛文7年（1667）の検地帳に「ふし塚」との記載があり（『新編立川市史 資料編 柴崎の民俗』）、当地では古くから富士信仰が盛んであったことがうかがえる。塚の上には浅間神社があるが、明治42年（1909）に諏訪神社と合祀された際に同社境内に移された。神木は残ったが昭和23年（1948）の台風で倒れ、同25年に再び塚上に浅間神社が祀られた。

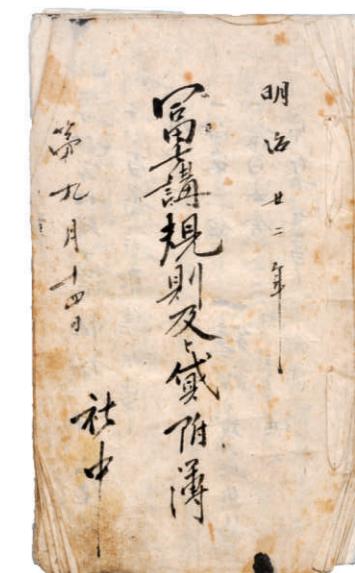


12諏訪郡湖南村富士講資料 個人蔵



12-2「富士講代参順席帳」

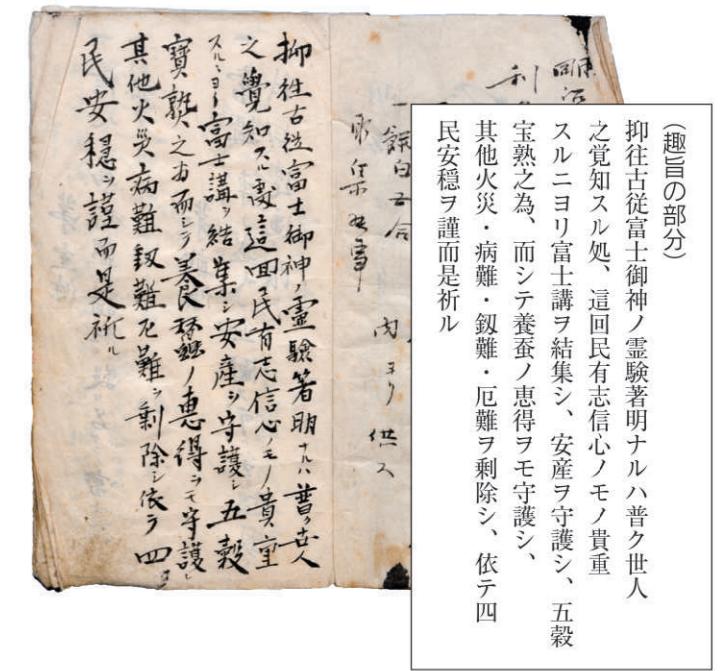
明治36年（1903） 縦13.0cm×横31.0cm
湖南村の富士講では数年に1回、日待の場でくじをひき、代参の順番を決めた。「富士浅間」の1文字ずつに1番、2番と割り当てられている。



12-1
「富士講規則及ヒ貸附簿」
明治22年（1889）

縦26.1cm×横15.4cm

明治22年に結成された湖南村の富士講について、趣旨・規則・講員名・金銭の貸付を記した帳面。規則では第1条で、「信心のために同盟の講社を設け、名付けて富士講とする」としている。第3条で毎年2人の代参を立て、6円の代参料を渡し、講中に1枚ずつお札を配ることとする。第5条では毎年9月14日に日待を行うことについて定めている。



(趣旨の部分)

抑往古從富士御神ノ靈驗著明ナルハ普ク世人之覺知ニ處。這国民有志信心ノモノ貴重スルニヨリ富士講ヲ結集シ、安産ヲ守護シ、五穀寶熟之功而テ養蚕發達ノ惠得ヲ守護。其他火災・病難・鉢難・厄難ヲ剰除シ、依テ四民安穩ヲ謹而是祈ル。

食行身禄と扶桑の教え

江戸時代中期以降、富士信仰の集団である富士講が流行するが、その教えのルーツは伝説的宗教者の長谷川角行に求められた。角行の系統は3世の明心の弟子・月明と月行の時に二派に分かれ、後にそれぞれ村上派（光清派）・身禄派として活動する。月明は天和3年（1683）、キリスト教と疑われ、江戸町奉行の取り調べを受ける。その供述によると、弟子の月心とともに下野国足利郡大月村（栃木県足利市）を訪れ、月心が村人の求めに応じ、「かい子の守」を100枚ばかり書いて与えたという。

月行の弟子・食行身禄は享保18年（1733）、富士山七合五勺の烏帽子岩で断食行を決行、入定した。断食中の身禄が語ったという教えは、「三十一日の御伝」にみることができる。身禄は、日本は桑を以て人の生活を助ける「扶桑国」として養蚕の重要性を説く。蚕の神が給う糸で作る衣服は人の助けとなる。これは「仙元大菩薩」の「御助」である。蚕を飼うことで日本が「扶桑国」であることを知るべしという。富士から生まれた桑の精と身禄がみなしたのが三女・花である。花は養蚕の教えをうたう「蚕和讃」を残した。このように富士信仰の教えの中では養蚕が重要視された。

明治維新を迎えると富士信仰にも変化が訪れる。北口本宮富士浅間神社は富士嶽神社と名を改めた（明治43年〔1910〕に戻される）。明治6年（1873）、この富士嶽神社をはじめとする富士山麓の浅間神社の宮司となったのが宍野半である。京都の平田鉄胤から復古神道や国学を学び、神道国教化を推進する教部省に出仕した経験を持つ宍野は、富士信仰の統合を試みる。各地の富士講や吉田御師などに働きかけ、9月に富士一山講社（明治8年、富士一山教会と改称）を創設、同9年には神道事務局に所属し扶桑教会を名乗る。同15年に事務局から独立した扶桑教会（9月より神道扶桑教）は、経典となる『扶桑教』や勤行のための祝詞形式の『神徳経』を刊行した。浅間大神を養蚕の神とする『養蚕神徳経』も作られた。

身禄が説く養蚕の教え

食行身禄は享保18年（1733）6月13日から31日間の断食行にはいる。この時期に身禄が語った教えを、吉田御師の田辺十郎右衛門（近江）が筆記したとされているのが「三十一日の御伝」である。のちに多くの写本が書かれて富士講の流行をみた。この「三十一日の御伝」には、以下のような身禄の養蚕に関する教えが説かれている。

6月13日

日本は「扶桑国」である。桑をもって人を助けるとの理である。

7月2日

仙元大菩薩には尊い三神がある。鬼王・王万・大我と名付けられ、蚕の神になった。高位の人は装束で官位を正しくして、下々の人は肌を隠し、寒暑の気を防ぐ。このようなお慈悲を給うのが仙元大菩薩である。我が国では仙元大菩薩は尊い蚕の真神となり、桑を食餌として糸にならしむ。これが扶桑国の証拠である。蚕が蚕種紙に種を残すことは神への「通音」である。このことは蚕を養い育てるこことによって知るべきである。

7月4日

蚕の神より給う糸で、その身の「禄政」を改め、心をよく磨き、身を真っ直ぐにして人間の鏡となるべき人間の再興の助けにもなる者は仙元大菩薩の「明慮」にかなう。



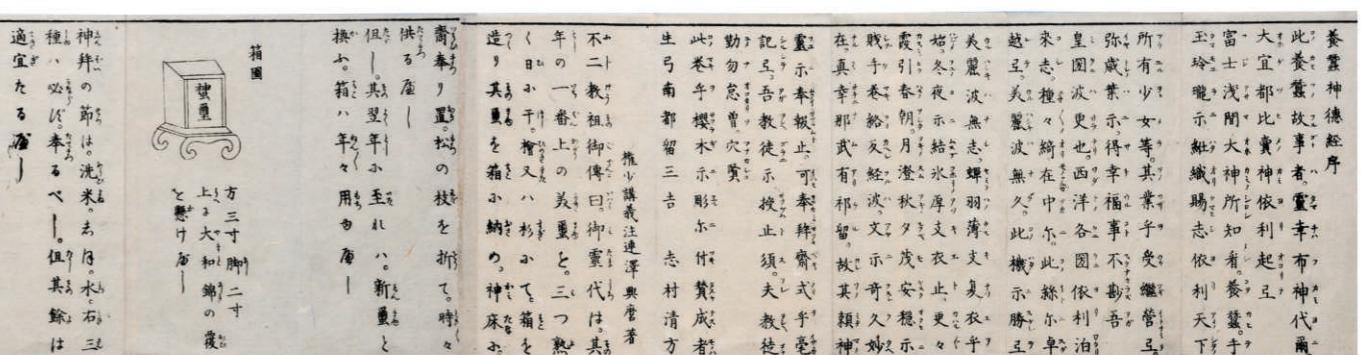
13富士嶽神社養蚕護符

明治時代

個人蔵
縦32.4cm×横10.8cm
北口本宮富士浅間神社は明治元年（1868）に富士嶽神社と改称する。同6年2月に富士山本宮浅間大社の宮司となり、7月から富士嶽神社をはじめとする浅間神社の祀官を兼ねた宍野半は富士信仰の統合を試み、のちに神道扶桑教を創立する。写真的護符は從来の浅間神社に対する養蚕信仰（p6）を取り入れた富士嶽大神の効驗を示している。



富士嶽神社の養蚕護符は、他地域の寺社の養蚕護符とともに伝來した。師慶山医王寺（真言宗。奈良時代に行基が「師慶山観音院」と名付けたとの由緒を持つ。埼玉県秩父郡皆野町）、熊野神社、木靈（きむすび）神社（秩父郡小鹿野町か）、三峯神社（秩父市）と、主に秩父地方の養蚕信仰を示す一群の資料である。



14「養蚕神徳経」序

個人蔵
明治13年（1880）
縦15.0cm×横59.5cm

この「養蚕神徳経」はさまざまな神事・祝詞などを集成した折本に収録されている。編集兼出版者の注連澤（しめざわ）興磨は吉田御師で、明治18年（1885）より富士嶽神社の宮司を務めた。序文では養蚕の起源を『古事記』に登場する大宜都比売神（オオゲツヒメノカミ）に求めている。大宜都比売神は、素戔鳴尊（スサノオノミコト）が食物を求めた際に、鼻・口・尻から食物を取り出して殺され、自らの体から五穀や蚕を生じさせた女神である（『日本書紀』では保食神〔ウケモチノカミ〕）。そして養蚕を広めたのが富士浅間大神としている。その年の一番出来の良い繭を「御靈代（みたましろ）」として木箱に入れ、神床（かみたな）に祀る作法も記している。

企画展「富士山と養蚕－信仰の側面から－」展示資料

No.	資料名	年代	所蔵者	掲載頁
1	木花開耶姫命御影	年未詳	個人	6
2-1	木花開耶姫命御影版木	年未詳	小室浅間神社	7
2-2	養蚕護符版木	年未詳	小室浅間神社	7
3	蚕神像	年未詳	個人	11
4-1	右左口養蚕関係資料－蚕影山奉納札	平成6年(1994)・同19年	個人	11
4-2	－稻積神社養蚕護符	昭和時代	個人	11
4-3	－山梨県蚕業試験場卒業記念アルバム	昭和9年(1934)	個人	2・3・10
5	木食白道作蚕守護版木	江戸時代(18-19世紀)	個人	13
6	円通寺鬼鹿毛馬頭觀世音護符	年未詳	個人	13
7	荒止馬觀世音菩薩絵像	昭和7年(1932)	個人	13
8	「お猫さん」護符	年未詳	個人	15
9	富士講碑拓影	原碑:慶応4年(1868)	原碑所在:大月市猿橋町小沢字田中	17
10	蚕養塔拓影	原碑:文政12年(1829)	原碑所在:大月市猿橋町小沢字田中	17
11-1	小永田浅間神社祭祀資料－護符入木箱	年未詳	小永田浅間神社役員会	19
11-2	－蚕神護符版木	年未詳	小永田浅間神社役員会	19
11-3	－蚕神印章	年未詳	小永田浅間神社役員会	19
11-4	－養蚕家内安全護符版木	年未詳	小永田浅間神社役員会	19
11-5	－安産護符版木	年未詳	小永田浅間神社役員会	19
11-6	－大黒天護符版木	年未詳	小永田浅間神社役員会	19
12-1	諏訪郡湖南村富士講資料－「富士講規則及ヒ貸附簿」	明治22年(1889)	個人	21
12-2	－「富士講代參順席帳」	明治36年(1903)	個人	21
13	富士嶽神社養蚕護符	明治時代	個人	23
14	「養蚕神德経」	明治13年(1880)	個人	23

パネルによる展示

15	「富士風穴略説」	明治36年(1903)以降	山梨県立博物館	5
16	富岳風穴内蚕種冷蔵庫絵葉書	昭和11年(1936)	個人	4
17	馬鳴曼荼羅	江戸時代	長谷寺	9
18	鈴木平九郎「公私日記」	天保15年(1844)	個人(立川市歴史民俗資料館保管)	20

山梨県立富士山世界遺産センター

令和2年度 第二回企画展

富士山と養蚕－信仰の側面から－

協力者(順不同)

古賀立身、注連澤一仁、立石尚之、千野健、畠山豊、林部光、船木賞美、船木政行、
船木善保、古家達男、宮下重範、上野原市教育委員会、小室浅間神社、
甲府市教育委員会、小菅村教育委員会、小永田神代神楽保存会、
小永田浅間神社役員会、立川市歴史民俗資料館、長谷寺、
富士河口湖町教育委員会、山梨県立博物館、山梨市教育委員会

本誌は企画展「富士山と養蚕－信仰の側面から－」(令和2年12月25日～令和3年2月23日)の概要を紹介した展示解説です。展示物以外の資料や景観などについても写真を掲載しています。写真解説に付した算用数字は、展示資料の資料番号です。

執筆・編集は、当センター調査研究スタッフ(金子誠司・堀内亨・堀内眞・根岸崇典)が担当しました。

令和2年(2020)12月25日発行

編集・発行 山梨県立富士山世界遺産センター

〒401-0301

山梨県南都留郡富士河口湖町船津6663-1

TEL 0555-72-2314

印 刷 株式会社 少國民社

〒400-0851

山梨県甲府市住吉1-13-1

TEL 055-226-2125